



特集1

地域の自然にかかわる思いを記す

フィールド・ミュージアムの担い手たち

特集2

「まち」こそ文化の交流の舞台

市立図書館・博物館・公民館との地域交流

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

題字 黒部行子
絵 成瀬洋平

小さな薪ストーブが森の見方を変えた

——手作りの工房は、地域に生きる問い直しの拠点——

今泉 吉晴

地

域交流研究センターが発足して4年が過ぎようとしていく。私は前半の2年間をセンター長として仕事をさせてもらい、後半の2年間は退職して著述業でくらしを立てるかたわらセンターの特別非常勤講師として地域とセンターをつなぐ役割になった。センターがどのような成果を生んだかをはかるのは難しいが、4年をへて地域と社会からじかに学ぶことができるよさを切実に感じる。

私がつたずさわる著述業の労働環境も、他の仕事の領域と同じく厳しい。大手出版社が先導して書き手に悪条件を押しつけるから、会社の言いなりに仕事を受けているのは仕事本来の目的がはたせない。ヘンリー・ソロ（1817～1862）のようにどのような仕事がかくらしと社会を共によくする本当の仕事かを問う必要がある。

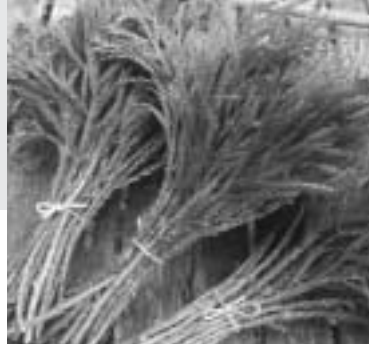
本当の仕事とは何か。ソロは、人は1年のうち6週間ほど働けば、あとの日は自分を自由に楽しませる時間に見える、と書いている。そうして自分らしさを育むことが社会に貢献する道であるといって実行し、収支決算まで示して、ほら本当でしょう、と私も訳した『ウォールデン』でいっている（71頁～79頁と88頁、小学館、2002年）。

私はそういわれてなるほど分かったつもりが、言

葉面をとらえただけで分かっていなかった。その私、この4年のセンター活動でソロがいう仕事の意味が分かってきた。地域にはたくさんの手作りの仕事場が息づいている。それらは大量生産・大量消費のくらしを問い直す生きもので、地域に根をはって独自の生き方をつらぬいている。

——昨年、2005年12月のこと、私は大月市にある岡部鉄工所の佐々木裕子さんからストーブ・シンボジウムを開くので話をしてほしい、と依頼された。前年にストーブ・シンボジウムを開いたところ、愛好者が全国から集まり盛会だった。第二回のストーブ・シンボジウムでは私にソロの暖炉とストーブ、それに私が山小屋で使っているストーブについて話して欲しい、ということだった。

私には岡部鉄工所がストーブの専門工場ではないところがよかった。村の鍛冶屋にはじまる鉄工所で、鉄製品への多様な需要に応えながら同じ技術で厚い鋼板から機能美あふれるストーブを作っている。私は山小屋で20年以上もストーブを使っているが、当時は販売店がなく、フィンランド製の珐瑯びき鑄物ストーブを銀座の暖炉店で購入するよりなかった。大きく重く、



火がつきにくく、燃え始めると暑すぎた。
私は岡部鉄工所に小さなストーブを作ってもらいたいと頼んだ。佐々木俊夫さんが応じてくれ、私が描いたストーブのイメージ図に打てば響くように応えてくれた。私が最小のストーブを指す訳、縦長のストーブの肩に薪の投げ込み口をつける理由、空気の取り入れ口と燃焼室の広さとのつりあいなどを適切にとらえて一気に細部をつめた。できあがったストーブは天板が広くて放熱効果を高めており、かわいらしくもあって、夢のようだった。

ストーブは6畳用で、燃焼室の床が20×17センチしかない。山道で拾う木切れを薪にするストーブである。小さな燃焼室が熱を保って、木切れを気持よく燃す。

裏山に木切れがあふれる現代にびつたりりのストーブである。

ストーブは趣味で使うならスイッチ一つで部屋を暖める現代の暖房器具と何も変わりはない。だが、自分で拾った木切れでストーブを焚き、部屋を仕事も動物観察も食事もできるような日々居心地よくあため続けるには時間と工夫がいる私は動力機械は使わない。たき付けの確保、薪の入手と保存、手早い点火、火の調整と保持、消火と再点火、といったストーブ維持の課題に悩んで小さなストーブで試行錯誤をくり返す。くらしと仕事に対する考えをもっとエコロジーの考えでひっくりかえさなければ、と思えば決断できる。

小さなストーブは直径7センチまでの薪しか入らず、長さも制約されるから、燃し方も、薪の用意の仕方もみな新しくなる。しかし、肝要なのはいつでも素早く火を大きくできるようにたき付けとその使い方を確立することと分かった。私は私の森ではスギの葉とヤマブキの枯れた茎が最良かつ豊富なたき付けと知ったが、私の工夫の一端として前者の扱い方を紹介したい。乾いたスギの針葉は爆発的にもえあがる。それは小さな炎を一気に燃え広げるには便利で、囲炉裏なら使えるだろうが、小さなストーブでは燃焼室いっぱい炎があがって危険だ。おまけにあがった炎は酸素をいっつくして薪に点火する力がない。そこで小枝ごと落ちたスギの葉を拾い、余分の葉を切り落として絵筆のように小枝の先に葉がふくらむ形を整えた。これをつぎつぎにくべると小枝に炎が移って、薪に手早く点火できる。つまり小枝つきのスギの落葉を束ねておくことが、たき付けの留意になる。

このような工夫と作業は手間ひまがかかるが、探検

と探求の楽しみ、遊びであってきりがいい。だが、全体の行程を体系化するには、遊びが必要である。私は著述業の仕事に優先してよいかどうかを心に問うた。あわせて私は、ストーブの維持のために森や草原を散歩することは、散歩を広く深くし、森や草原のふつうには目を向けない細部をよく見る願ってもない機会と知った。家の外壁に一年分の薪を積み上げるような備蓄は時間を集中して使えず、自然の中にそのままにしても備蓄になる、という考え方をとる方がいい。私のくらし方では必要なく、備蓄は緊急用の一週間分くらいにとどめて、日々の探索に重ねて木切れを集めることが採集ぐらしの原則になる。なぜなら、森を見るのは毎日がいいからだ。薪ストーブを使うことがそのままフィールド・ミュージアムになっている。

佐々木さんは岡部鉄工所のパンフレットに「薪ストーブは人と人を、人と自然をつなぎます」と書いているが、私の小さなストーブにもはつきり効能があった。私がこの体験を新聞のコラムで紹介したところ、読者から同じストーブを作っていいか、というたくさんの手紙をもらった。製造会社の名はださなかったが、岡部鉄工所にも多数の問い合わせがあり、対応に大わらわだったという。地域交流とは探求であり、大学がそのセンターを持つとは実地に人間研究に取り組む宣言になっている。

(いまいずみ よしはる・地域交流研究センター 特別非常勤講師)

写真右ページ上…集めた小枝を短く切る
左ページ右上…たき付け用に小枝つきのスギの落葉を束ねておく
右下…山道で木切れを拾う
左…小さな薪ストーブでさっそくシチューをつくる

地域の自然にかかわる 思いを記す

特集

1

フィールド・ミュージアムの担い手たち

地域の「自然」に惹かれ、フィールドをもち、その観察を続けている人たちがいます。特集1では、三人の方に登場していただき、「自分」という視点からフィールドとのかかわりを書いていただきました。それぞれの関心のもち方や、実践の展開の仕方は多様です。人格と結びついたその実践の格闘に見出される諸価値は、これからのフィールド・ミュージアムの共同の文化遺産になっていくのだと思います。

都留の自然と子どもたちの橋渡し

小口 尚良

①

「子どもたちに身近な自然を」——これはわたしがこだわりをもつ一つの大きなテーマです。子どもたちを含め、わたしたちは多くの情報を得ていますが、情報源の多くは、テレビや新聞、インターネットなどで、そこにはわたしたちの身近な生き物や環境についての生の情報はありません。世界中のさまざまなことを知ることが大切かもしれませんが、自分が、自分たちのくらしている地域がどんな場所なのか、どんな生き物がどのように暮らしながら自然(生態系)をつくっているのかを知ることが、自然に対して大きな影響力(支配力)をもつ人間として大切なことだと思いません。また、自然の中に入って散策することは、自分を見つめなおしたり、イメージをふくらませたり、新たな発見をしたりと、喜びをともなう楽しいことでもあります。

そのような考えをもちながら、これまでやってきたことを振り返ってみてと思います。

②

まずは生き物たちとの出会いの場づくりです。これは、わたしが教員になったころ、大学の今泉(吉晴)教授を中心に立ち上げた「エンカウンタースペース(出会いの場)プロジェクト」(フィールドミュージアム構想)の考えを子どもたちの身近な環境にとりいれたものです。飼育して(閉じ込めて)、観察するのではなく、動物たちの必要とする環境を人間側にも無理がない形で用意し、互いの要求を満たした出会いの場をつくるというものです(わたしの把握では)。

わたしは当時勤務していた禾生第一小学校で、教室のベランダにエノキやカラタチ、ユズ、グレープフルーツ(給食で食べたものの種をまいて育てたもの)、クローバーなどチョウの幼虫の食草や吸蜜用の花の鉢を置きました。秋にはかごに果物の切れ端をいれたりもしました。その結果、アゲハチョウが蜜を吸いにおとずれたり、ルリタテハやアカタテハを間近で観察できたり、モンキチョウやゴマダラチョウが卵を

産みに訪れたりしました。

学校だけでなく、家でもやってみました。わたしが以前すんでいたアパートは国道に面した場所でしたが、ちょっとした水場と花壇をつくることで、3種類のカエル、キセキレイ、たくさんのチョウとの印象深い出会いを楽しむことができました。ある年は春先に植え替えをしようと掘り返していると、大きなヒキガエルが冬眠しているのを見つけました。まさかこんなところで冬眠しているとはと、うれしくなりました。アマガエルは、新たに水場をつくるどこにいたのかその日のうちにやってきて鳴き始めます。アマガエルの鳴き声はいやというほど聞こえてきますが、鳴いている姿はその気にならないとみることができません。といってもむずかしいわけではありません。そっと近づいてしずかに見たいといったのです。実際に見てみるとたいしたものです。さすが、この小さな体で遠くまでとどく声を出すわけだと感心してしまいます。

他にも紹介したいおもしろい出会いが数多くありました。これは都留であれば多少の差はあってもどこでもできる取り組みです。

③

さらに一歩進めたのが、大桑山(うぐいすホール)の裏の観察フィールド



1 地域の自然にかかわる思いを記す

づくりです。これは里山といわれるエリアでの生き物との出会いの場をつくる取り組みです。モデルは今泉教授の観察小屋。わたしが大学4年生のときつくられた小屋で、野ネズミやリス、ムササビなど野生哺乳類との出会いができる場所です。念願かなってそれを自分でつくり始めたのが1993年の夏。アパートの隣のおじさんから山の土地をかりて、水を引き、ホームセンターでプレハブを購入し初代大桑小屋をつくりました。最初はヒノキの暗い林でしたが、間伐し、動物たちが必要な空間や巣箱などを整備し、数年でムササビ、リス、野ネズミの観察できるフィールドになりました。水場もつくったので、鳥や水生昆虫、カエルなども訪れるようになりました。

10年が過ぎ、湿気により床が腐り始めたので、2004年の夏、手作りで2代目の大桑小屋を作りました。続けて2006年の夏は、野生のもぐら観察を目標に、半地下構造の初代モグラ小屋を作りました。モグラの観察はまだまだ先の話（実現するかも不明）ですが、「窓を開けるとそこは地面」という小屋で、野ネズミの観察は期待以上にできました。

4 出合いの場をつくる取り組みは自分自身も楽しめることですが、やはりわ

たしの場合、発見したおもしろさを子どもたちと共有したい、一緒に味わいたいという思いがあります。しかし学校の授業で野生哺乳類の観察をすることには、時間的にも場所的にも無理があります。しかし、学校としてはなく、別の形でそれは実現しました。「うら山観察会」の設立です。うら山観察会はフィールドミュージアム構想の教育・普及部門として1989年にスタートしました。中心テーマは「都留の自然と子どもたちの橋渡し」。ムササビ、リス、ネズミなど野生哺乳類の観察や、コースを決めて季節ごとに歩く「うら山探検」、ホタルの観察会などを行なってきました。事前観察や準備など大変なこともあります。参加者が動物たちと出会えて、動物たちの魅力と一緒に感じる事ができたときは、その苦勞も報われる思いです。

5 観察会は直接自然のおもしろさを味わったり伝えたりできる面では他に代え難い取り組みなのですが、日常とは離れた感じがします。わたしはこの「日常」にもこだわりをもっていきます。ふだんの生活の中で、すぐそばの草むらや水場、あるいは近くの山の中でこんなおもしろいことがあるんだということと子どもたちに伝えたい、そんな思いがあります。きっかけは1995年



のアフリカ旅行です。広い草原。たくさんの草食動物。そして彼らを捕えて食べるライオンなど肉食動物。スキールの違う自然を毎日見ているのだのです。「なんでアフリカにいるのだから。もっと自分の足をみなくては。石船神社のムササビにこそ見る意味がある」と。

そして、もどってきて当時勤務して

いた旭小で始めたのが身近な生き物の紹介。そのころはインクジェットプリンターでカラー写真が手軽に（コストは高かったのですが）印刷できるようになっていた。写真をフォトCDにしてパソコンを使って自然の紹介を始めました。子どもたちの反応がいいので途中からクイズ形式にして、ほぼ毎日身近な自然を紹介しました。その



ネタ探しのため、土日は学区の野山を
図鑑を持ち歩き回り、たくさんの生き
物やその観察スポットを見つけました。

⑥

そのころから教材を意識した写真や
ビデオ映像がたまりはじめ、今では（整
理できていないので使えるのは一部だ
けれど）かなりの量になりました。学
校は以前に比べて慌ただしく、追われ
てばかりでなかなか子どもたちに身近
な自然を日常の中で取りあげることが
しにくくなっていますが、これからも

こだわりをもちつつ取り組んでいきたく
いと考えています。

都留はとても恵まれた場所だと思ひ
ます。手のとどく所にある程度の豊か
な自然がある。この自然の価値を再認
識して、自然とよりよい関係を作って
いくという流れができることを願いま
す。そしてその流れに関わっていけれ
らなあと思ひます。

（おくち ひさよし・都留市立谷村第一小学校教諭）

地域に生きて 地域の自然と 暮らしを記す

北垣 恵仁

地域交流研究センターが発足して5年を迎えようとしています。この間、センターでフィールド・ミュージアム部門の仕事の一部を担当してきました。また、センターが発行する『地域交流センター通信』の編集作業にも携わってきました。フィールド・ミュージアムが大学に位置づけられたことで地域のさまざまな方々との貴重な出会いを体験でき、そうした人々に支えられながら私の関心の領域もしだいに広がってきました。

そもそも私の関心の中心は、身近な野生動物がどのように暮らしているかという謎を解くことにありました。この謎を解くには、頻繁に通い観察できるフィールドをもつことが欠かせません。学生時代、都留市の西南に位置する大沢の渓流で数人の仲間とカワネズミ（カワネズミは水中で魚や水生昆虫などを食べて暮らす哺乳類です。水中を泳ぐさいには毛が銀色に輝いて見えることから「銀ネズミ」と呼ばれることもあります）という動物を観察していました。1年ほどこの渓流に通ううちに、観察場所のそばに土地をもちロッジを営んでいる佐藤和男さんと知り合いました。この出会いがあったからこそ、私は観察の拠点となる6畳ほどの小屋を建てることができましたし、佐藤さんのロッジに巣箱をつくるなど森づくりのお手伝いを通して今でも交流が続いています。はじめてフィールドをもつというこの経験から、野外での動物観察は地域の人の協力なしにはできないという基本を実地に学ぶことができました。

大沢フィールドのほかに、私は大学から歩いて20分ほどの場所に動物観察の拠点をもちことができました



大沢に建てた野生動物の観察小屋



溪流に暮らすカワネズミ。その生態はいまでもほとんどわかっていない



南向きで明るい印象の中屋敷フィールド。中央の建物は観察小屋

(地名から私たちは「中屋敷フィールド」と呼んでいます)。「ここはなだらかな南向きの斜面で、山と川に挟まれそのあいだに田畑がありますが今ここで農作業をする人はほとんどいません。モモやウメ、リンゴなどの放棄された果樹園もあり、西側の田には富士山の湧水が湿地をつくりだしています。なだらかな斜面には大きなエノキが枝を伸ばしてもいます。

このような場所はけっして特殊ではなく、今の日本の農村ではどこでも見かけることができます。農村の今をうつしだしている典型的な場所と言えるでしょう。森のなかにある大沢フィールドとは異なり広く開けた感じに惹かれて通ううちに、ここで農業をしてこられた渡辺宗男さんと出会うことができました。

私にとって渡辺さんは森の師匠です。中屋敷フィールドに造った観察の拠点も渡辺さんの納屋を改造したものですし、湧き水を引くパイプも手伝って頂きました。こうした作業をお手伝いするうちに、柱の組み方など小屋の作り方一つをとってもそこには渡辺さん独自の暮らしの知恵がみごとに活かされていることを学びました。今年77歳になられますが、自然との暮らしのなかで生きる知恵を自分のものとした最後の世代と言えるかもしれません。今では毎年、学生も参加して渡辺さんとともに稲作に取り組んでいます。しかし収穫期には、イノシシやニホンザルに食べられなかなか収穫までたどりつけません(30頁参照)。頻繁に出会うこうした大型獣との共存のあり方も私の探求の大きなテーマとなりました。

大学の授業を通しての出会いもありました。私が担当している博物館関連の授業で、都留市のむかしを撮

影した写真を探してみたところ、都留市在住の奥隆行氏(33頁参照)が多くの写真を所有されていると知りました。さっそくご自宅に伺い見せていただいた写真は、一枚一枚、台紙に貼られコメントとともに丁寧な整理、保存されていました。写真の総数は4000枚を超えていましたし、都留の農業、街並み、スポーツなどさまざまなテーマで整理されていました。これらは二度と撮影できない都留市の貴重な財産のように私には思えたのです。

プリントされた写真は時間とともに劣化していきま。そこで、奥氏が丹念に集めた写真資料をデジタル化する作業に取りかかりました。一枚、一枚コメントとともにデジタル化していく作業はじつに時間がかかると作業で、一通りの作業が終わるまで3年ほど必要としました。私は奥氏が長い時間と情熱を込めて集めて



渡辺宗男さんに学びながら観察小屋をつくる(中屋敷フィールドにて)



中屋敷フィールドでは、大型獣との共存を考える田植えに取り組んでいる

こられた写真の整理をお手伝いしたにすぎません。むしろその間、奥氏から写真にまつわるさまざまな記憶を伺うことができたのは私にとって大きな財産となりました。

写真には多くの情報が写し込まれています。たとえば都留の森がどのように変化してきたかはインタビューしただけでは分かりにくいものです。写真には明治時代の山の様子も写し込まれており、一目で当時の森の様子がイメージできました。

さらに、整理した写真を持って地域の方に話を伺うと、その時代に生きた人でなくとも強い共感を持って具体的に話をしてくださることに気がつきました。写真には失われていく風景と記憶を今に留める力がある

のでしよう。奥氏の想いを受け継ぎながら今後どのようにコレクションを活かしていくかが私たちの課題の一つとなります。写真の一枚一枚に地域の方々の多くの記憶を重ねて記録し、共有していけば、地域社会のこれからを考えるうえで大きな力となるでしょう。

こうした地域の方々との出会いと交流によって、私は記憶が記録として残りにくいことも学びました。人の記憶として残っている自然との関わりを記録として残し共有できないだろうか。こうして記録の保存に学生とともに取り組んだのが「フィールド・ノート」という雑誌づくりです。この雑誌づくりがフィールド・ミュージアムへの学生参加の受け皿とならないか、との思いもありました。この雑誌もセンターの発足と同時に年10回のペースで発行を続け、今年で発刊5年目を迎えます。発行からこれまでは順調に事が進んだわけではありません。発行の体制をどのように整えるかなど試行錯誤の連続でした。今では、小学校教諭の小口尚良氏（4〜7頁参照）や奥隆行氏にも参加していただいています。

編集に参加したある学生はつぎのように感想を記しています。「私が担当しているのは、都留に住んでいらっしゃる方の日常の暮らしを伺うというものだ。この取材では、人に出会うだけでなく、その人の経験や思い出を聞かせていただける。転機となった出来事、失敗、今を楽しむ秘訣。これらを通して人の生き方を学んだ。自分で取材対象をみつけ、取材をしてわかりやすい文章をつくるというのは、かなり大変な作業であると思う。じつさい何度もやめてしまいたい衝動にかけられたが、取材先の人に楽しみにしているよ、という

温かい言葉をかけられるたびに仕上げようという気持ちが増した」。

またある学生は、「自分の足で歩き、自分の目で見て、そのなかで感じとったものを書くということは何度か経験していくうちに、だんだん編集という作業が楽しくなってきた。もちろん、これといって文章がうまくわけではないし、日本語の使い方だってあやしいところもある。だが、回を重ねることにいつも小さな喜びと発見があった。心が揺さぶられ、自分のなかから自然に言葉が生まれてくる瞬間があった。そんなときは書くという抵抗が消え、むしろ自分の感じたことを素直に文章にすることで、それを誰かに読んでもら



記録とともに台紙に貼られた写真の数々（奥隆行氏のコレクション）



2004年に開設した富士急行線都留文科大学駅前
ここではすでに展示活動を始めている

いたい、共感してくれたら嬉しいとさえ感じるようになっていた。私の場合は編集を通して、自分を見つめる機会が多くなった。そして見失っていたほんらいの自分に出会うことができた」と感想を述べています。

自分の関心にそって自由な発想で物事を見つめ、それらを表現していくことで、自分と向き合い、確かな手心えとともに自分の成長を感じることができたという意味がここうした感想に込められているのではないでしょう。私は、編集という行為に学生の「伸びる資質」を育む働きがあることを教えられたのです。

この雑誌づくりでは小さな交流も数多く生まれましました。大学のそばにある喫茶店では毎号のバックナンバーを店内に挿え本棚をつくってくださり、「この雑誌はほんとうに都留の博物館だね」という言葉を編集に携わる学生にかけてくださいました。こうした温かい言葉が学生たちを励まし、地域との精神的な距離を縮めていきます。

今年度からこの雑誌づくりの経験を活かして、地域

交流研究センターのカリキュラムで半期の授業として地域をテーマとした編集作業に取り組みました(29頁)。また、こうした編集の経験はセンター発行の『センター通信』にも活かされています。

昨年10月22日、「富士急行電車まつり」が富士急行線河口湖駅で開催されました(32頁)。そのイベントに展示パネルを出展することで富士急行線の関係者の方々との交流も生まれました。富士急行線は大月駅と河口湖駅を結ぶ全長27キロほどのローカル線です。標高差が約500メートルあり、この区間に18駅があります。この路線を利用した博物館構想は、すでに本学の卒業生の加藤春喜さん(1993年本学卒業)が卒業論文としてまとめています。チョウが訪れる花壇を駅につくるということだけでも学生や市民の交流が生まれ、駅が自然と親しむ拠点となり、地域の魅力を高く評価するきっかけにもなるでしょう。

農業を営みながら創作、評論活動をしているウエンデル・ベリー(1934)はその著書『ライフ・イズ・ミラクル』(法政大学出版会、2005年)で次のように述べています。「経済によって農業人口を破壊することからもたらされる最も重大な犠牲の一つは、地域の記憶や地域の歴史、地域の名前が失われていくことである。例えば前の畑、とが後の畑といった、ぱっとしない呼び名でさえ文化の重要な目印なのである。もしも芸術や科学が学問の専門化に有頂天になることから目覚めるなら、これまで破壊するのに手を貸してきた場所にとどまり、それらを故郷に変えることで歴



『フィールド・ノート』の編集に取り組む学生

史を再建したり、名前を思い出すことに着手しようとするだろう」

私はセンターの活動を通してじつに魅力ある多くの人に出会うことができました。そして身近な野生動物の暮らしの謎を解くという私の関心は、地域の記憶や歴史、人々が時間をかけて築いてきた自然との関わりがあり方や知恵とけっして無縁ではなく、むしろこうした幅広い視点から探求する必要があることを学びました。考えてみればごくあたりまえのことかもしれませんが、しかしようやくそのことに気づくことができた4年間だったと私は考えています。

(きたがき けんじ・本学特別非常勤講師)

校舎の裏の林が 私に教えてくれたこと

坂田 有紀子



大学の中心に位置する講義棟である1号館は、大学構内で最も古く、歴史ある建物です。その1号館の裏に小さな林がひっそりとたたずんでいます。林としては、猫の額ほどの小さな空間ですが、驚くほど多様な動植物が暮らしています。今日は、この6年間に私がこの林と付き合いながら学んだこと感じたことをお話ししたいと思います。

この林は約40年前に、当時の教員と職員が皆で土を盛り木を植えた、手作りの林です。40年経って、当時はまだ小さかった稚樹が、直径30cm、高さ15m以上の見上げるほど立派な木々に育ちました。ブナ、ホオノキ、ケヤキ、コナラ、クリ、オニグルミ、ヒノキ、モミなど、大学周辺の山に自生する種を中心に、70種類もの樹木がたった7m×40mのスペースに生育しています。春にはフキノトウが顔を出し、色とりどりの林床植物が咲き、秋になれば様々なキノコが生え、昆虫や木の実を食べるに野鳥や野ネズミも遊びに来ます。か



ヒメコウゾ

つて教員と職員が協力し合って作った林ですが、40年の間に教職員も学生も何度となく入れ替わりました。物言わぬ木々たちは、40年という時の流れをこの林の中で静かに刻んできたのです。

ところが5年前、静寂なこの林の環境が激変する出来事がありました。多くの木が切り倒されたり、枝葉のほとんどを切り落とされるといふ非常に乱暴な伐採がおこなわれたのです。

その結果、林床が劇的に明るくなったため、成長の速い雑草や、タケ、ササが生い茂り、林は藪と化してしまいました。伐採以前にはユキノシタやジャノヒゲ、カンアオイ、シャガなど日陰を好む林床植物が絨毯のように地面を覆っていました。日陰を好む林床植物は成長が遅く背も高くないため、草刈などをしなくても、林床は歩きやすく散歩や自然観察するのに適した環境でした。40年という長い時をかけて成熟した林は、人間の手入れ無くしても安定した自律的な平衡状態を



完成直後の池

保っていたのです。ところが、伐採・剪定によって明るくなりすぎたために雑草やササが生い茂り、年に数回下草刈りをしないと、とても人が入れないような林に変わってしまったのです。

こんなことになるのなら、剪定などしない方が良かったわけですが、当時の伐採担当者はこんなことになるなんて予想が付かなかったのかもしれない。いえ、予想できててもそれでも切りたかったのかもしれない。何故、そうまでして木を切りたいのか？その根底には、擬似的自然に心地よさを感じる現代日本人の自然観があるのではないかと思います。自分の生活圏内に手入れをしていない雑然とした自然があ

ると、不快に感じ、綺麗に整備したくなる。自然は大切だと標語のように理解はしていても、どこか他人事。国立公園や風光明媚な観光地に車で行って、展望台から景色を眺め記念写真を撮ってそれで満足。多くの日本人にとって自然は外から眺めるものに成り下がっているのではないのでしょうか？

しかし、当然ながら自然は単なる風景ではありません。そこには、その環境に応じた生態系があり、さまざまな生きものたちが暮らしています。人間の目には雑然としたあるいは汚く見える自然の中にも、そこには確かな生きもの営みが存在しています。

例えば、昨年、1号館裏の林に学生たちと池を作った時のことです。スコップで穴を掘って、ビニールシートを張り、石と土を被せて、水を張っただけの小さな池ですが、池が完成した直後に、どんな生きものが入ってくるか、学生たちと追跡調査をしました。

最初にやってきたのは、緑藻やアメーバでした。そのうちボウフラが一面に発生し、学生たちからは批判続出。「ただでさえ、林の中には蚊やブヨが多いのに、これ以上増えたら大学や学生から文句を言われる」とか、「ボウフラを減らすために、魚を入れよう」とか、「景観を綺麗にするために水生植物を植

えよう」などの意見も出ました。でも何とか思いとどまらせ、時が経ち自然に池の生態系のバランスが取れるのを待つことにしました。

2年目の夏は、ボウフラの数が1年目より目に見えて少なくなりました。それから1ヶ月ほどすると池の周りの雑草の茎にヤゴの抜け殻がたくさん見つかるようになりました。それも大・小2種類のヤゴです。それらはシオカラトンボとヤブヤンマだとわかりました。池を作った年の夏の終わりに彼らが出来てきて産卵していたのです。秋には池の上の木の枝から落ち葉が供給され、その落ち葉を食べる水生昆虫が発生して、その水生昆虫を食べてヤゴが成長し、トンボになって……。魚がいなくても、綺麗な水草がなくても、その環境に適した生きものがやってきて、相互にバランスを取りながら生態系が成立することを目の当たりにできた出来事でした。

一見よどんで汚く見えるこの小さな池に、ヤゴを始めとする生き物たちの世界があることを知ってから、学生た

ちの認識は、「汚い・気持ち悪い池」から「見た目は悪いけど、まあいいか」と変わってきたように思います。

このようにそこに住む他者の生活を想像し思いやることは、何も自然保護や環境保全のためだけにとどまらず、いじめの解決や異文化理解や世界平和のためにも大切なことではないでしょうか。単純化しすぎだとあきれられる方もいるかもしれませんが、私は本質的には同じだと考えています。世界中の人々が自然を愛し他の生物を尊重できるようにになれば争いもいじめも存在しない、そんな気がします。自然を愛し他の生きものを尊重できる人を育てるには、何も雄大な美しい自然がなくてもいいのです。ごく身近な日常にある自然の中に、生きものの息吹を感じる、これを積み重ねることが最も大切なことなのだと、1号館裏の林は私に教えてくれたように思います。

(さかた ゆきこ・本学初等教育学科教員)



谷の町 史の里 図書館のあゆみ展

2006年10月28日～11月9日

市立図書館・地域交流研究センター共催事業の報告

青池恵津子



都留市立図書館と地域交流研究センター・フィールドミュージアム部門は、2006年秋の読書週間にちなみ、市立図書館において、『谷の町 史の里 図書館のあゆみ展』を開催しました。

これは、現在の市立図書館に至る、戦前戦後のまちの図書館活動百年のあゆみを、写真や蔵書、文献・史資料を使ってはじめて紹介したものです。

これまで、市立図書館の歴史について書かれた通史のような文献はありませんでした。そこで、図書館の沿革を調査するにあたっては、市民、郷土研究会会員、市史編さん関係者、県立図書館関係者等、多くの方々のご教示を得て、図書館が所蔵する市の発行物や市民の著作などから関連する記述をさがし、新聞記事、町役場の統計報告、図書原簿、関係資料等で裏づけをとりました。また、県の教育史や図書館史等により、日本の図書館運動や図書館史における位置づけ、歴史的背景を考察しました。

図書館のあゆみ展から

戦前の図書館活動紹介

市立図書館のルーツをさぐる

■床屋文庫―近代公共図書館活動の原点―

1914（大正3）年10月30日付の山梨日日新聞は、谷村町（現在の都留市中心部）の「床屋文庫」設立を次のように報じました。

「南都留郡谷村小学校附属図書館は床屋文庫なるものを設置し、町内信用ある床屋に対し文庫を貸与し立ち寄る者に閲覧の便宜を与へ、現在配送を受ける床屋七

軒あり……」

また、市内の小学校の歴史を詳述した『学校沿革史（一）』（中野八吾、1969）には、「床屋文庫は小箱に十数冊の小説類を入れたものでこれを一カ月位で交換した」とあります。

この床屋文庫は、市立図書館の直接の前身とはいえませんが、コーヒーハウスに雑誌や本を置いた（社会教育の原点とも言われる）イギリスの例同様、理髪店という公衆の場で本を公開するという発想は、公共図書館活動の原点といえるべきものであり、市立図書館前史に位置づけられてよいでしょう。

「南都留郡谷村町明細地図実業家案内」に見る谷村町

誌面背景のこの地図は、1916（大正5）年につくられた広告地図で、町内の商工業者について、店の屋号、営業品目、電話番号等を記しており、床屋文庫当時の谷村の町の様子を知ることができます。中央に馬車鉄道が走り、織物関係諸業、旅館、医院・病院、料亭、造り酒屋、牛肉・砂糖・醤油・茶・製菓ほかの各種専門店、銀行・金融機関が軒を並べ、弁護士・法律事務所、新聞社支局、さらに、書店も二軒見られ、郡役所所在地であった町場のにぎわいを伝えます。この町のあちこちに「床屋文庫」が置かれました。

■谷村図書館―文化の摂取は読書から

「葆光倶楽部」の活動―

明治32年の「図書館令」を受けて、大正年間には全国各地に「通俗図書館」（現在の公共図書館）が急増

しました。1927(昭和2)年6月、町の有志らが教育文化を論じ活動する「葆光倶楽部」(通称「葆光会」)は、「(文化の摂取の実現は)読書に俟(ま)つべきもの……図書館を設立し現代文化の醍醐味を味わいたく」と趣意書^①を発表し、わが町にも図書館を、と町民に図書館設置の賛助をよびかけました。^②

『学校沿革誌(一)』(前掲)には、「学校にあつては一般町民に利用されないため……(谷村)小学校内にあつた日露戦役記念図書館^③を(仲町大神宮の公会堂に)に移し……谷村図書館と名を改め……と記されています。当時の関係者の話(記録)によれば、会員の出資により、幹事が東京へ出向いて図書を購入して、貸出等は青年が奉仕したとされます。また、同趣意書は、この図書館を「将来適当ノ時期ニ於テ町に寄附スル」と予告しています。市立図書館はこの谷村図書館の蔵書の一部を受け継いでいます。^④

このような、非営利団体が経営する図書館には、イギリスでは、読書による自己教育と国民的娯楽に因えるため、トマス・カーライルが提案したロンドン図書館(1841)がありますが、葆光倶楽部の活動はこれに通じるものがあります。

なお、昭和2年は、『岩波文庫』が創刊され、日本近代詩と近代音楽の巨匠・土井晩翠と山田耕筰が、谷村工高のために「山梨県立工商学校校歌」をつくつた^⑤とされる年です。

■図書館のあゆみ展を開催して

戦後、日本の公共図書館は、教育基本法、社会教育法、図書館法の制定を経て、読書推進活動の中心的役割

割を担ってきました。都留市図書館もまた、市民や都留大生の読書と学習を支えてきました。

しかし、今、社会情勢や暮らしの変化、ITの普及等によって、図書館には多様な機能が期待され、活動の見直しや、民間への移行までも検討され、さまざまな意味で「変革」を求められています。

今回の『あゆみ展』は、図書館の存在と意義について考える機会となりました。わたしたちは、城下町として、地域の政治・経済・文化の中心として栄えたまちの文化的風土を大切に、先人たちの先駆的な活動に思いを寄せ、まなびのまちの伝統にふさわしい図書館のあり方を深く考えてゆくべきでしょう。

(ああいけ えつこ・都留市立図書館司書)

註

- (1) 宮井幾三氏旧蔵の原本による
- (2) 趣意書によれば、当時山梨県下に二十余の公私立図書館があった。
- (3) 戦利品や日露戦史等を集め、日本古典文学集、三省堂の国民百科辞典、其他小説類もあった。当時、軍国主義、愛国心高揚の国策により、「日露戦役(争)を冠する記念行事が日本各地で奨励された。
- (4) 昭和13(1938)年 谷村町役場統計報告(公私立図書館調)によれば、谷村図書館は、昭和2年9月設立、谷村小学校内に附設の「私立」図書館。蔵書数1175冊、開館日数350日。
- (5) 都留市博物館ミュージアム都留の「土井晩翠と山田耕筰展」による。

市立図書館と地域交流

写真上・谷村図書館がおかれた大神宮境内の谷村町青年会館、「公会堂」は通称か。(奥隆行氏所蔵絵葉書)
写真下・2002年リニューアルされた現在の都留市立図書館



誌面背面は、「南都留郡谷村町明細地図実業家案内」1916(大正5)年
(資料提供:奥隆行氏)



ミュージアム都留の企画展 「土井晩翠と山田耕筰 –日本近代詩と近代音楽の巨匠–」を開く

奈良 健三

平成18年9月1日から10月29日まで、ミュージアム都留において、企画展『土井晩翠と山田耕筰 日本近代詩と近代音楽の巨匠』が開催されました。この企画の趣旨は、土井晩翠と山田耕筰という、日本の近代文化の発展に寄与した偉人たちについて、その生涯・功績を展望しつつ、都留市に残した足跡を紹介するというものです。

晩翠と耕筰が都留市とかかわる具体例としては、市内にある県立谷村工業高校の旧校歌の作詞作曲を行ったことがあげられます。今回の資料調査の過程では、晩翠が校歌制定当時の校長である河口孝氏宛てに、歌詞の訂正を求めた葉書と、それ以前の明治末ころ、海外国語中に河口氏に宛てた絵葉書数枚が、河口氏の長女宅から発見され、校歌作曲の事情の一部が明らかとなりました。

本展開催に当たっては、県立谷村工業高校の創立110周年記念行事の一環として、同校の同窓会の後援を受け、多大な協力を受けました。とくに同窓会長の高取賢二氏には、晩翠・耕筰両名の資料や、谷村工業高校の歴史について、多くの助言や資料を頂きました。また、本展期間中に、関連イベントとして、「童謡・歌曲を歌う会」、「胡演奏会」、「詩の朗読会」を開催しましたが、その際には都留文科大学合唱団及び都留市公民館学級、朗読ボランティアサークル「こぶたの会」の方々の協力を頂き、好評を博することが出来ました。右の方々には、この場を借りてお礼を申し上げます。

結論として、地域に埋もれた歴史を地域の人々の力を得て掘り出し光を当てるのが地方博物館の役割のひとつである、ということを示すことが出来た企画展であったと思います。

公民館活動の展開 都留市中央公民館「二胡学級」

青池 恵津子

私たち「二胡学級」は、『土井晩翠と山田耕筰展』関連イベントに協力し、ミュージアム都留で二胡の演奏会を行いました。演目は、展覧会にちなんだ「さくらさくら」「赤とんぼ」「荒城の月」などのよく知られた晩翠と耕筰の作品と、この二人の巨匠が昭和初期、地元山梨県立谷村工業高等学校（現）のために作詞作曲した「山梨県立工商学校校歌」です。また、学級講師・前田登先生により中国の歌曲も演奏されました。展覧会の後援者である谷村工高同窓会ははじめ、大勢の来館者の皆さまには、二胡という珍しい楽器の音色に触れ、併せてふだんあまり意識することのない公民館の存在に注目して頂けたと思います。

公民館は、図書館や博物館と並ぶ重要な社会教育機関です。都留市の公民館には、約30の各種学級があり、二胡学級はその一つです。20代から60代の主婦、会社員、公務員など、年代も職業もさまざまな会員が、月2回、YLO会館に集い、切磋琢磨して二胡を習っています。

公民館の学級は、民間の教室やカルチャーセンターと異なり、市民が自ら組織し、行政の援助を得て自主的に運営するものです。私たちは、この活動を単に個人や同好者の楽しみ、技術習得の場とするのではなく、学んだことを周囲に伝え、地域に広げて、学びを糧に市民が輝く活力ある「教育首都 都留」のまちづくりに貢献したいと思います。主体的な学び合いによる人格形成、郷土や社会を考える仲間作りは、公民館活動の原点であり、戦後に憲法と教育基本法がかかげた教育の目的にかなうものだと思います。

（あおいけ えつこ・都留市立図書館司書）

童謡を通して見えてきたもの

梅原 真由美

「童謡・歌曲を歌う会」のお話をいただいてから、気付いたことがあります。それは、私たち学生が童謡から離れつつあること、童謡をあまり知らない世代になりつつあるということです。今回の出演は、そんな私たちにとって、日本の歌の原点へ立ち返るきっかけとなりました。

当日はあいにくのお天気で心配していましたが、会が始まる頃には雨もすっかり上がり、たくさんのお客様が足を運んで下さいました。今回私たちは、山田耕作・土井晩翠と親交のあった滝廉太郎作曲の「花」「箱根八里」を歌わせていただきましたが、歌いながら、都留のみなさまの温かさを身にしみて感じました。うなずきながら聴いて下さる方、懐かしそうに一緒に口ずさんでいらっしゃる方、そしてたくさんの拍手。地域の皆さまとの触れ合いに喜びを感じるとともに、世代を越え歌い継がれてきた童謡の魅力を再認識した一日でした。

歌う会終了後には、館内を見学させていただき、山田耕作・土井晩翠、さらに都留についても、大いに学ぶことができました。それは、都留という地にいなから、都留の歴史や文化に触れる機会がなかなか持てない私たちにあって、とても貴重な経験だったと感じています。

童謡を通して、都留の皆さまの温かさ、都留という地をより身近に感じられたこの機会に、心から感謝しています。

（つめはら まゆみ・都留文科大学合唱団、本学初等教育学科3年）



ミュージアム都留提供

地域交流研究センター主催事業「フィンランド月間」(20頁を参照)を契機に、フィンランドに関心を寄せる池田和秀氏との交流が生まれました。池田氏に、「フィンランド月間」のシンポジウムに参加しての感想とともに、フィンランドの音楽家養成の事情について書いて頂きました。



「自学力」に根ざすフィンランドの芸術家教育 「学力世界一」との共通項

池田 和秀

私は、かねてからフィンランドという国に興味を持っており、教育についても「学力世界一」の好成績を収めたというニュースに接して以来、注目をしてきました。

昨年3月には『音楽の友』誌の取材でシベリウス音楽院や音楽学校を訪問して、「教え込むのではなく、考える力を育てる」、「子どもの発達にそって学ぶ意欲を引き出す」といったフィンランド教育の特徴が、音楽教育でも共通していることを確認し、このような教育スタイルがどのように確立してきたのだろうかという問題意識を持ちました。

そういう中で参加した地域交流センター主催のシンポジウム「フィンランドの教育・日本の教育」は、私の問題意識を触発してくれるものとなりました。

とくに田中孝彦先生による、「フィンランドの子どもたちには 地域に根ざし、世界と向き合う 教養の蓄積がある」との指摘は、教室での教授法にだけに注目していた私に、子どもたちを取り巻く社会をその母胎とし、地域と教育の関係をとらえていくという視点を与えてくれました。

■自分で考え、実践する、自己探求の場合
シベリウス音楽院の指揮者教育

私がシベリウス音楽院を訪れた背景には、1980年代以降、フィンランドから国際舞台の第一線で活躍する指揮者が続々と登場しているという状況があります。人口わずか520万人の国から、どうして優秀な音楽家たちがこれほど輩出されるのか その秘密を探ることが、この取材の目的でした。

シベリウス音楽院は、フィンランド唯一の音楽大学であり、音楽教育の頂点に位置する機関です。私は2日間わたって指揮科の授業に立ち会い、教授陣や音楽院スタッフにインタビューを重ねました。その教育の特徴は、常勤講師のアツオ・アルミラ氏が語ってくれた次の言葉に集約されています。

「モーツァルトはどういうふう演奏すべきかを講義するのではなく、学生自身にどう演奏するかを決めさせ、本物のオーケストラの前に立って試してみる機会を可能な限り与えるというのがクラスの方針です。それこそ指揮者が学んでいく方法として最善のものだと考えています」



日本を含め多くの音楽大学ではピアノを相手に指揮をする授業が一般的ですが、シベリウス音楽院では毎週本物のオーケストラを使った授業が行われています。学生たちには自分の持ち時間を自由に使うことが保障されており、教授は舞台の隅から学生の様子をただ見守るだけです。指揮科の教員には、学生が指揮しているときに途中で口を挟まないようにとのルールが課されているからです。

指揮の様子はビデオに収録されていて、クラス全員の実習が終わると、ビデオを見ながらの検討会が行われます。ここで初めて、教授が一人一人の指揮ぶりにコメントを加えていくのですが、学生たちは、教授の指摘をただ拝聴するのではなく、お互いに自由に意見を言いあい、教授にも臆せず自分の考え方を主張しています。ここでは「意見をためらいなく表現し、話し合うこと」が大切にされています。

音楽院のスタッフは、教育のなかで大事なこととして、自分で決断できる人間、自分で判断し勉強してゆく人間をつくることをあげていました。フィンランドの学生は、「みずから探究し学んでいく力」、ゆうなれば「自学力」とでもいうべきものを高校までの教育でつちかっています。音楽院は、そのような「自学力」のうえに、演奏家としての自己を探究していく場となっているのです。

■日本の教育とフィンランドの教育

このような学習方法は、フィンランドの学生にとっては当然のことでも、日本で学んできた学生たちは当惑を覚えるようです。日本では曲の解釈や表現方法を事細かに教え込むというスタイルが一般的です。シベ

リウス音楽院でヴァイオリンを学ぶある日本人留學生は、先生から「こう弾きなさい」と指示されることが少ないために「放っておかれているんだ」と感じ、何度も泥沼にはまったと言います。5年間かかってようやく教育の意図が「自分で自分のやり方を見つけていきなさい」ということだと気づいたそうです。

フィンランドが優秀な音楽家を生み出す理由には、ここで紹介したような、学生たちの自己探求を見守ってゆく教育方法が大きく作用しています。

同時に、政策的に音楽を国づくりの礎石と位置付け、音楽教育に力を入れてきたことも大きな要因です。フィンランドでは、シベリウスの楽曲が民族独立運動の中で大きな役割を果たしたことから、音楽が特別の地位を得ています。そこから、1960年代以降、家庭の財政事情にかかわらず誰もが平等に音楽を学べる制度が構築されていきました。中長期的な視野に立った政策が実り、80年代以降、才能ある音楽家が次々と登場するようになったのです。

こうしたフィンランドの教育に触れてゆくほどに、私はいま日本で進められようとしている「教育改革」に違和感を覚えます。短絡的な成果を求め、さらに統制と競争の強化を指向しているように見えるからです。フィンランドの教育に対する探究を深めながら、日本の教育を考える取り組みを今後すすめていきたいと考えています。

(いけだ かずひで・音楽ライター／日本シベリウス協会運営委員)

写真右ページ上…指揮科の授業風景。左端で教授が見守っている
左ページ右…実習後の討論風景。撮影したビデオを見ながら議論を交わす
左…シベリウス音楽院の玄関を臨む



都留文科大学にはフィンランドの教育・文化に造詣の深い研究者が複数いるということで、地域交流研究センター主催で、「フィンランド月間 教育と文化を探る」という事業が開催されました。なおこの事業は、平成18年度県民コミュニケーションカレッジ分担講座として開かれました。全体で200名を超える方が参加されました。

聴講者から、「素晴らしい企画、内容であった」「大学のこうした講座を心待ちにしている」というたくさんの方の言葉をいただきました(アンケートや感想)。今回お招きした外部講師の方々からも、大学のもつ充実した内容の講座にお褒めの言葉をいただきました。なお、ホームページを見て、東京など遠方からいらした参加者もありました。

以下に開催にあたっての言葉と事業一覧を掲載しておきます。

◆開催にあたっての言葉

森と湖の国、サンタクロースの故郷としてもおなじみの《フィンランド》が、今注目を集めています。

最も政治家の汚職の少ない国と評価されています。

世界経済フォーラム報告で国際競争力1位になっていきます。

世界経済フォーラムの環境維持可能指数でも1位です。

ヨーロッパの旅の好感度1番に選ばれています。

世界で最も水がきれいだと評価されています。

ITの活用が最も進んでいます。(フィンランド大使館HPより)

最近ではフィンランドを舞台にした日本映画「かもめ食堂」が話題となり、フィンランドのデザイン、ファッションも高い評価を得ています。そして一番注目したいことは「フィンランドの教育について」で、大学の複数の教員が実際に当地を訪れ、研究の成果も発表しています。

そこで都留文科大学では今年10月を「フィンランド月間」と題し、フィンランドの教育とその背景にある歴史、文化を紹介する講座を開催いたします。

◆事業内容

第1回 10月7日(土)

テーマ「叙事詩『カレワラ』の世界」

講師 鳥居明雄(本学比較文化学教科員)

第2回 10月14日(土)

テーマ「フィンランドの自然と歴史」

講師 高田理孝(本学初等教育学教科員)

第3回 10月18日(水)

シンポジウム

テーマ「フィンランドの教育・日本の教育」

パネリスト 田中孝彦(本学初等教育学教科員)

福田誠治(本学比較文化学教科員)

森 博俊(本学初等教育学教科員)

第4回 10月21日(土)

テーマ「フィンランドのデザイン 一流デザインブレイヤーとしてのイッタラ社」

講師 サトウ・マリア・アホ(イッタラ社エクス

ポートマネージャー)

協力 フィンランドセンター

第5回 10月28日(土)

テーマ「透明な大気と水が育んだ音楽 J・シベリウ

スを中心に」

講師 清水雅彦(本学初等教育学教科員)

ヴァイオリン演奏とお話 佐藤まどか



写真上：シンポジウム「フィンランドの教育・日本の教育」の情景
写真右下：シンポジウムのパネル



一昨年(2005年)に、都留文科大学の教員を中心にフィンランド教育の調査が行われ、地域交流センター通信10号でその特集を組みました。そのフィンランド調査のときにお世話になったペンティ・ハッカライネン教授(カヤーニにあるオウル大学)が、都留文科大学に来られ、研究・教育の交流が行われました(2006年10月25〜26日)。そのときハッカライネン氏は、「ナラティブラーニングと教師教育改革」と題して講義もされました。教室は超満員で、探究心そのものがもたらす心地よい空気が感じられました。そのときの講義を聴いての感想を、受講者の一人に書いて頂きました。(編集部)

ハッカライネンさん(オウル大学カヤーニ校副学長)の来校・講義に寄せて

佐藤真紀子

2006年10月、小さな教室は学生、教授方で溢れ、ハッカライネンさんが話し始めると、その語りを聞き漏らすまいとする緊張感で空気が引締まったのを覚えています。以下に、講義の中で私の印象に残ったことを中心に感想を述べさせていただきます。

学びへの動機

勉強が出来た・出来なかったという結果ではなく、学ぼうという意識が持てたかどうか、勉強が楽しいという気持ちを持てたかどうかをより重視していました。子どもたちの中にある、未知のものへ惹かれる探求心をとても大切に見ているのだと感じました。そして、学ぶことをワクワクさせる一つのツールとして、演じることを取り入れた学習を紹介されました。

ロールプレイすること

ごっこ遊びのような形で、物語の中で役を演じながら問題を解決していく過程で、演技者としての変化と現実の自分の変化が絡まりあいながら、子どもの成長を促進させていくことを彼は話していたように思います。実際に自分の身体を使い、父親や母親の役を演じるごっこ遊びの意味や、懂れることの大切さを考えま

した。人は懂れを抱くことによって、今の自分をより良く変化させようとしていけるでしょう。だからこそ、私たちは、子どもたちが懂れを抱けるような社会をつくっていく必要があります。

フィンランドにおける新しい学びのモデルを知ることが刺激となり、私自身も、混迷する日本の教育の動向を憂慮するだけでなく、私たちの歴史や地域と重ねながら、子どもたちのどのような成長を願い、どういった学びをつくり出すのか、模索し続けなければならぬと強く感じ直しました。

最後になりましたが、北海道での国際学会の報告を終え、遠く都留まで足を運んでくださり、私たちに真剣な眼差しで訴えかけてくださったハッカライネンさん、そしてこのような機会をくださった先生方に心より感謝しております。

(さとう まきこ・本学大学院生「臨床教育実践学専攻」)

「臨床道化師」クリニックラウン登場!

主催・初等教育学科臨床教育学コース、地域交流研究センター発達援助部門

去る2006年12月13日、同じ「臨床」という苗字をもつ、臨床道化師・塚原成幸さんをお迎えして、第3回目の「臨床教育学懇話会」が開催された。ワークショップと引き続き講演会を通して、笑いのある楽しい雰囲気の中で、お互いが臨床と名乗ることの共通の意味を確認しあうことができた。そして、役割や場の違いを超えて、今いかにそれが必要とされているかということを確信し合えた出会となった。

クリニックラウンを知る

篠原みさと

今回のクリニックラウンの講演会では、私の中で学ぶことはとても多かったと思います。例えば、コミュニケーションやユーモアの話は、滅多に聞く機会の無いものであったように思います。なかでも印象深かったのは、ワークショップでの、アイコンタクトのゲームです。日常生活でも時々あるけれども、誰に話しているのか分からないということ。また、そこから相手の気持ちがあったりもします。アイコンタクトは、意識されて会話することはあまりないと思います。が、実は、人と人との関係作りにおいて、とても重要な要素の一つなのだと感じました。

講演会に向けて、私はゼミの友人と一緒にポスター作りをしました。即座に思いついたのが、ピエロでした。赤いつけ鼻をつけて、派手な服装にインパクトのある化粧をしている。そんな考えの中で絵を描いていき、ついに出来上がりました。

クリニックラウンが来る前に、みんなである程度の知識を持つておこうということで、ゼミで事前学習をしたのですが、そのことによりクリニックラウンに対する



考え方が訂正されました。「よく知りもしないで描くもんじゃないなあ」とつくづく思いました。つまり、クリニックラウンが化粧をしないことや鼻を付けることなどどんな意味があるのか、どんな考えで活動しているのかといったことが分かってきたのです。先にポスターを作ってしまったことに後悔の念が湧いてきました。こうして事前学習とワークショップ、講演会を通して、私のなかのクリニックラウンのイメージが深まってきました。

(しのはら みさと・本学初等教育学科3年)

*クリニックラウン(臨床道化師)とは、「クリニック」と「クラウン」を合わせた造語で、入院生活を送る子どもの病室を定期的に訪問し、遊びとユーモアを届け、子どもたちの笑顔を育む道化師のこと。



第9回「山梨県地域教育フォーラム 南都留集會」が開催されました

主催・南都留地域教育推進連絡協議会、
富士・東部教育事務所、山梨県教育委員会

テーマ・「子ども達の教育は地域全体で担う
地域連携・地域交流を深めるため
に」

日時・2006年11月6日(月)
会場・富士吉田市立明見小学校

全体会のあと、「授業交流を通して未来を見据えた活動を考える」など7つの分科会に分かれて、実践報告と質疑討論が行われました。本学の地域交流研究センターの協力も4回目となり、今回は本学の教員である高田理孝氏、粕谷貴志氏(特別非常勤講師)、佐藤隆氏、西本勝美氏、筒井潤子氏、森博俊氏、吉住典子氏の7名が助言者として参加・協力しました。

地域の教育を みんなで支える

古屋 光昭

「子どもたちの教育は地域全体で担う」というテーマを大前提に今年度で9年目を迎えた。同学年・同校種間のみつながりではなく、幼稚園(保育園)から大学までという縦のつながりにも着目し、さらに学校という現場のみならず、地域の各種団体にも協力や支援を呼びかけ、地域総ぐるみで子どもたちの教育を担っていくこととするものである。

◆充実しつつあるフォーラムの課題

9年目ということもあり、各分科会に於いて多少の温度差はあるが、提案内容、討議内容など、徐々に質の高いものになりつつある。またこのフォーラム自体も、地域に徐々に定着しつつあるという段階にきている。

今後の課題として検討すべきこともある。次年度に向けて、フォーラムの反省や結果をふまえた取り組みや研究を継続し発展させていく体制ができていないことである。理由としては、各種団体の役職が当番制でローテーションをしていたり、また、人事面において2〜3年毎に異動してしまうということもあり、各分科会の継続した運営が困難である点が挙げられる。一つ一つの課題や研究を一ヶ所に固定して継続的に研究に取り組むということがなかなかできにくいのが、現状である。

◆都留文科大との交流を

都留文科大の地域交流研究センターの先生方に助言者を依頼して今年度で4年目に入った。助言者の先生方の発言や提言、最後の講評及びまとめ等を楽しみにしている会員も多い。そういった意味でも来年度以降も助言者をお願いしたい。

また、フォーラム以外でも「教育相談ネットワーク」などで指導助言をいただいているが、地域交流研究センターと連携した行事などを企画したり、学校諸機関と地域を繋げる何らかの取り組みをするなど、さらなる交流を願っている。

(ふるや みつあき・山梨県富士・東部教育事務所地域教育支援スタッフ主幹)



教育現場の 悩みに応える

都留文科大学地域交流研究センター
地域教育相談部 公開講座

2006年11月23日

参加者の感想より

Q Uという調査法を活かしながら観察法と面接法をきちんとしていく。これだけという枠にとらわれず、きちんと子どもの様子を見ているからこそQ、Uが生かされるのだということがわかりました。エンカウターの実践は、集団を読む力が大切なのだということを知りやすくて説明していただけだったので、すごく実践的で勉強になりました。またエンカウターについて勉強したいです。

(20代 学生)

Q U入門はとてもわかりやすかったです。午後の構成的グループ・エンカウターは、はじめて学級の状態にあわせてアレンジしたエクササイズの話義だったので、とても意義深く、勉強になりました。今後現場で大いに生かしていきたいと思えます。

(20代 教育関係者)

エンカウターという名前は知っていましたが、具体的にどういったものなのか知りませんでした。午前の部ではQ、Uについての話を聞いていくうちに、自分の学級はどうであろうかと心配になりましたが、午後の部も通して聞いていくうちにどのように改善していこうか考えることが多くなり、とても充実した一日を過ごせました。

(20代 教員)



校内研究を担当する立場として、的確に課題を提示していただき大変ありがたかったです。後半、グループディスカッションもあり、他県の先生と話をする機会がもてたことも収穫でした。午後も学級の状況に応じたエンカウターをはじめ、発問の仕方、教師の動きまで、現場を経験された先生ならではの内容で参考になりました。

(40代 教員)

午前の河村先生の講座のなかで、自分の課題意識の曖昧さを感じました。具体的にどう生かすことを改めて考えようと思いました。午後の品田先生の講座では書籍を読んだだけでは伝わらないような具体性とインパクトがあり、Q、Uを活かしたエンカウターの新しい魅力にふれることができました。

(40代 教員)

講座内容

「Q・Uをつかった学級集団の理解」入門
講師・都留文科大学地域交流研究センター
特別非常勤講師 粕谷貴志
都留市立禾生第一小学校 浅川早苗

「教育実践・校内研究のまとめ方
Q・U等のデータを活用して」
講師・都留文科大学大学院 河村茂雄

「学級集団の状態に合わせた
構成的グループ・エンカウター」演習
講師・都留文科大学非常勤講師 品田笑子
都留文科大学非常勤講師 武蔵由佳

* Q (Questionnaire-Utilities)とは児童生徒一人ひとりの学級生活についての意識を質問紙により測定し、その結果から児童生徒一人ひとりの援助ニーズと学級集団の様子を知る尺度のこと。

学校では、不登校、いじめ、非行などの問題に加え、学級崩壊や授業の荒れの問題など、多様化したさまざまな問題に直面し、実際にこれらの問題にどのように取り組んでいけばよいのかということが大きな課題となっています。地域教育相談部では、どのように児童生徒と学級集団の状態を把握し、それをどう具体的に学級経営に生かしていくかというテーマに公開講座を行いました。午前は、児童生徒理解および学級集団の分析と把握を行う尺度Q、Uの概要や具体的な活用の仕方について学び、午後は、具体的な実践の方法として、学級集団の状態に合わせた構成的グループ・エンカウターの活用についての演習を行いました。県外からも熱心な先生方の参加があり、充実した講座になりました。

(粕谷 貴志)

反響をよぶ

都留文科大学地域交流研究センター

地域教育相談部の 公開講座

2007年2月2日

2月2日(金)午後6時より、本学2号館で地域教育相談部企画の公開講座が行われました。今回の公開講座では、全国規模の児童生徒の実態調査の分析を進めるなかで浮かび上がった、児童生徒および学級集団の実態を「データ」とともに示しながら、いじめや学級崩壊などの学校がかかえる課題に対応する視点を考えました。またそれらの課題に対応するポイントとなる人間関係の形成、集団づくりの方法の一つとして、構成的グループ・エンカウターの入門編も行い、実施のポイントを紹介しました。平日の午後からの公開講座にもかかわらず、都留市近郊だけでなく、甲府や上野原などからも先生方の参加がありました。また学生や現職の先生方だけでなく、PTA関係者の参加もあり、1部・2部とも200人を超える参加者で会場の2101教室が熱気につつまれました。

参加者の感想から

グループ・エンカウターの演習を通して、初対面の人たちとふれあうこのやり方がとても有効だと実感しました。教師にしても生徒にしてもお互いに磨きあっているような環境が必要なんだと思いました。(10代学生)

現場を知ることができてよかったです。エンカウターの演習では、人とかわるっていいなと思いました。教師という仕事に不安を感じていたのですが、河村先生の話聞いてとてもうれしく、「教師になるんだ!」とあらためて思いました。(20代学生)

今年度採用された教員です。今は担任ではありませんが、今後の自分の学級経営にとつて有意義な情報がたくさん得られました。また、日頃の授業で生徒たちに接する態度を振り返るきっかけになりました。(20代教員)

私は今まで教師になるための勉強として、「学力」「授業の進め方」しか考えていませんでしたが、本当は教師になるためにもっともつと重要なことがあったと知りました。(20代学生)

今教師6年目ですが、つらいこと、苦しいことが多いことも事実です。誇りと

使命感をもってこれからもやっていこうと思いました。(30代教員)

品田先生の講座では、構成的グループ・エンカウターの基本というべきものを学べてよかったです。教師自身が体でその良さを実感できていなければ、アレنجいもできないと思います。その点で体験したこともよかったです。河村先生の講座では、いじめの質について話されたところが納得できました。Q、Uのプロットを思い浮かべ、現在の学級の状態についてもう一度考え直してみようと思いました。(30代教員)

自分の学級はもちろん、同じ学校の他の学級も頭に浮かべながら話を聞いていました。来週からの実践に生かして行きたいと思います。今日は母校での講座に参加して大きな力をもらいました。(40代教員)

学力向上視点形成事業推進校になっていて、一度講義をつかいたいと思っていました。胸にすっと落ちる話をつかえて満足しました。学校にもどって詳細に伝えて参りたいと思います。(60代教員)



講座内容

「児童生徒の人間関係を育てる構成的グループ・エンカウター入門 - 学級集団の状態に合わせた構成 -」

講師・都留文科大学非常勤講師 品田笑子
都留文科大学地域交流研究センター 武蔵由佳

「現代の子どもと学級集団をどうみるか - いじめ、なれ合い型学級崩壊への理解と対応 -」

講師・都留文科大学大学院 河村茂雄
都留文科大学地域交流研究センター 粕谷貴志



都留文科大学と都留第二中学校との間で 双方向通信の遠隔授業が行われる

2006年10月17日

君田 和子

都留市内の地域交流の一環として、本学の杉本光司教授と情報センターが主体となり、都留市内の小中学校の関連機器の整備を平成12年度より開始し、平成17年度には、本学の「情報メディア演習」授業で、学生が作成したデジタルコンテンツを使い、双方向通信を利用した遠隔授業を行いました。今回はさらに一歩進め、中学生が直面している情報モラルに関する問題のひとつとして「著作権」を取り上げ、学生が自分たちで調査・作成した教材（Power Point）を使用し、中学校の「特別活動」授業の正規の1時間として、本学と都留第二中学校（指導員「三浦淳教諭」）との間で、IPテレビ電話と電子情報ボードを使い、遠隔授業を行いました。市内小中学校の先生方の研究授業として、多くの先生方も授業の様子を見学されていました。

授業の最後には、現在ハワイ大学で学外研究をしている杉本教授とTV会議システムを利用して、少しの時間でしたが3者間を繋いでパソコンでお互いの顔を見ながら会話することもできました。

* 双方の教室の様子を確認しながら大学で授業を進め、中学生からも直接発言し、画面に書き込むことができる。

構想・準備、約3ヶ月半。1時間分の教材ですが、かなりの作業時間をかけ、要点を絞り込みました。作業はコンピュータ学生指導員6名と情報メディア演習受講生が

自主的に進めました。

当初は、調べたことを説明さえすれば、と簡単に考えていましたが、甘い考えは準備段階で見事に却下され、リハーサルを重ねて技術と教えることに対する心構えが向上し、内容が見違えるようになりました。授業後は、共同作業の達成感が味わえ、教えることにより、逆に具体的な知識として自分達の身に付く、というおまけまでついてきました。

（きみた かずこ・本学情報センター）

中学生の感想

離れた場所にいる人に授業をしてもらうのがとても不思議な感じでした。難しい著作権の勉強も、クイズを使って楽しく学ぶことができました。とても良い経験になりました。

（都留第二中学校2年）

大学生の感想

今回の遠隔授業では、「教える」という立場から、いろいろなことを考えさせて頂きとても勉強になりました。遠隔授業は、講師側や内容などを充実させることによって、より多くの人が学ぶ機会を得ることができる可能性を持っていると感じます。学習方法のひとつとして、遠隔授業がさらに充実したものに発展していったらいいと思います。

（本学社会学科2年）

平成18年度都留文科大市民公開講座

英文学からみた「土地と文学」(全5回)

主催・地域交流研究センター

文学とその土壤に想いを込める

—平成18年度都留文科大

市民公開講座を終えて

依藤 道夫

都留文科大地域交流研究センター主催の公開講座は、今回は英文学科が中心となつて、平成18年12月から同19年1月末にかけて行われました。英文学科の5人の担当者が、イギリス文学からアメリカ文学にわたつて、また時代的には17世紀から現代に至り、更にジャンルのには英詩、アメリカ・ロマン主義、日本美術・文学、アメリカ南部文学、現代ニューヨーク演劇と、大変幅広く講じました。各講師には、「土地と文学」という共通テーマの下に、それぞれ得意とする内容を熱意を込めて講じていただけ、非常に有意義でした。参加した多くの学生諸君も熱心に聴いて下さいました。普段聞けない内容もあり、大いに学ぶところがあつたと思います。

こつこつ催しは、講師の個性や、話す内容における一層自由な独自色を出しやすいため、印象深いものになると言えます。将来にかけて続けてほしいものです。



市民の方々が一層参加しやすいように、会場を町なかに設定し、講座内容も更に広やかに考えてゆくのもまたよいでしょう。

深沢祥邦もとむねさんを始めとする大学事務局広報担当の方々のご尽力にも心から感謝したいと思います。

(よりよい みちの・本学英文学科教員)

講座内容

第一回 12月2日(土) 午後1時30分から午後3時
演題 「深南部ミンシッピーとウィリアム・フォークナー」
講師 依藤道夫(本学英文学科教員)

第二回 12月9日(土) 午後1時30分から午後3時
演題 「未知の世界を歌う—17世紀イギリス文学に見る南北アメリカ」
講師 富樫 剛(本学英文学科教員)

第三回 12月16日(土) 午後1時30分から午後3時
演題 「ナサニエル・ホーソンの『緋文字』(1850年)とハーマン・メルヴィルの『白鯨』(1851)—19世紀アメリカ文学の代表的作品の舞台の土地柄や風土について」
講師 儀部直樹(本学英文学科教員)

第四回 1月13日(土) 午後1時30分から午後3時
演題 「倫敦と牧野義雄」
講師 中地 幸(本学英文学科教員)

第五回 1月27日(土) 午後1時30分から午後3時
演題 「現代アメリカ演劇とニューヨーク」
講師 竹島達也(本学英文学科教員)

授産施設「みとおし」の活動に参加する

地域交流研究プロジェクト

「みとおし」は、禾生駅近くにある授産施設（障害をもつ方たちが働く場）です。現在11人の知的障害をもつ方たちが、「メンバー」として通い、うどんやクッキーづくり、農業・園芸等の仕事に従事しています。

昨年11月から月に一度、都留文大生中心の学生グループと一緒に、普段の仕事とは違う、みんなで楽しむ活動をするようになりました。みんなでお昼ご飯をつくって食べたり、ゲームをしたりしています。活動の様子を、「みとおし」スタッフの佐藤保成さんと、学生グループのメンバーに報告してもらいます。

土曜活動の始まり

佐藤 保成

「人は美味しいものを食べたときに幸せを感じ心も優しくなるのではないか」そんなことを考えながら、メンバーさんたちが工夫しながら美味しいものを作って食べられるようにと始まった、みとおし土曜活動も1月27日で第4回目となりました。始まり当初、多少緊張していたメンバーの方々も、回を重ねるごとに、「〃〃月は何をやるの？」「〃〃さんは今月も来るの？」「〃〃をしてみたい！」などこの活動が待ちどろしい様子です。また当日も、自ら「〃〃は私が出るので任せて下さい。」と主張して作業を進める方もいれば、普段あまり動きたがらない方でもボランティアの方と一緒に楽しく料理の材料を切ったりするなど、メンバー一人ひとりが、いつもの作業時とは一味違った表情を見せながら活動しています。スタッフの私は「メンバーさんたちの自立に向けてのお手伝い」という気持ちで活動に参加していますが、ボランティアとして関わってくれる都留文科大学の学生たちもメンバーの方々と同じ目線で考え、楽しみながら活動をともにしてくれているので、そのこともメンバーさんにとって土曜日の魅力のひとつとなっているようです。

（さとう） やすなり・みとおしスタッフ

「みとおし」の活動を通して

甲斐 寛育

先日、「社会福祉法人あすなるの会東部授産園みとおし」にボランティアとして参加させていただきました。活動内容は、月毎の担当者を決めてその担当で当日のレクリエーションの内容を

話し合い、全体でミーティングを行ってその月の担当を中心として当日来ることが出来るメンバーと「みとおし」の方々と振り分けそこから詳しい話し合いと当日に向けての準備をします。そして当日には施設の方々と一緒に様々な活動を行います。私たちが企画するレクリエーションは施設の方々が中心になるように心掛け、私たちは彼らの手助けをしています。何故なら、「みとおし」の掲げている目標の一つとして「施設の方々の社会的自立」があるからです。

前回の活動は施設で「クリスマス会」を開きました。目標として「クリスマスを知ろう」というもので、私たちはクリスマスの由来やそれにちなんだゲームを行い、施設の方々は私たちに劇を披露してくださいました。

私はこの活動を通して人として成長することができ、地域に密着した活動をしていくことで人の温かさや今後日本で一番必要となってくる「福祉」について改めて考えることができ、学生の時にしかできない貴重な体験をさせて頂いていることを嬉しく思っています。

（かい） ひろよし・本学社会学科1年



地域交流研究センターのカリキュラム「地域交流研究Ⅳ」の報告

雑誌編集が地域交流に果たす役割を考える

担当・北垣 憲仁

本年度後期の「地域交流研究」では、雑誌編集のプロセスを学び、じつさいに「地域の人と自然の交流」をテーマとした冊子制作に取り組みました。

本授業では、まず編集の具体的な過程やデザイン、レイアウトの基礎を学びました。そのうえで地域の方へのインタビューを行い、受講生全員で文章を検討しながら冊子を仕上げていきました。地域の方へのインタビュー、文章の練り直し、校正といった一連の作業を通して、冊子編集が地域交流や個人の成長にどのような役割を果たしているのか検討してみようというのがこの授業のテーマでした。

受講者は初等教育学科2名、国文学科4名、英文学科4名、社会学科4名、比較文化学科10名(計24名。学年は1年生から3年生)と全学科からの受講がありました。

完成した冊子のタイトルは受講生のアイデアで「Color」と名付けられ(完成した冊子には取材した方々のさまざまな魅力が込められていることからこのタイトルが付けられました)100部印刷し、取材でお世話になった方々にも配布されました。

自分を見つめ直す授業

上野 日菜

入学して都留に来たのはいいものの、都留の人々と交流出来ていないことに私は少し寂しさを感じていました。この授業を受講すれば、きっと地元の方の面白いお話しが聞けるのだろうと思ってとてもワクワクしていました。最初の授業で編集の作業が中心になると聞き、やっていけるか不安になったのも事実ですが、私のなかではその不安よりも、一度もやったことなかった編集の作業と、地域の方々との交流をするというテーマに対する好奇心の方が勝っていました。

授業では、インタビューをして記事をまとめる作業が中心となりました。この編集作業は私にとって、新しい視点から自分を見つめ直す機会となりました。一つひとつの言葉を、丁寧に、かつ読者にわかりやすく表現していくことで、自分自身を客観視できました。文章を書く行為そのものが力になるという私の新しい発見です。また、授業を一緒に受けている先輩方からのたくさんアドバイスを受け、文章の質も上げられたような気がします。

長いようであっという間に過ぎてしまった半年間。完成した冊子を手にして、本当に頑張ったよかったという思いでいっぱいです。実際、文章力が上がったのかどうかはわかりませんが、表現力が研ぎ澄まされたかどうかはわかりません。確実に変わったのは、ものの見方、見え方です。自分のなかに今までより大きな器を持てた気分です。

私はこの授業で得た多くの「力」を今後さらに発展させ、

将来の夢に向かってより多くの経験を積んでいきたいと思っています。

(うえの ひな・初等教育学科1年)

編集は「発見の場」

大下 友香

地域の人の話を伺いそれを編集し冊子にしていく一連の作業は、私にとって「発見の場」でした。一つは自分を発見する場。今回の授業を通して私はインタビューを文章にしながら、自分の考え方の癖や文章の癖と言つものに気づくことができました。

また、編集は自分の発見の場だけではなく他人の魅力を発見する場でもあると感じました。以前から気になっていたお店のマスターの生き方・考え方や、今まで知らなかった人と人とのつながりなど新しい発見がたくさんありました。それに受講生の他の人が書いた文章を添削させてもらうことは、体験の感動を共有するとともに、その人自身の考えや想いを知ることのできる貴重な場にもなりました。よく読書は体験することのできない世界を疑似体験できると思います。今回の授業で取り組んだ編集にも同じことが言えると思います。

半期の短い授業でしたが、地域の人との交流や、受講した仲間との体験の分かち合いから皆さんの元気を得られたことは、これから私が生きていくうえで大きな支えになると確信しました。

(おおしも ゆか・比較文化学科3年)

地域農業の価値を模索する

休耕地を観察しつつ「たんぼクラブ」の稲刈りが終わる

10月13日金曜日の午前中、稲刈りを行いました。参加学生は12名。8時30分に開始し、農業委員の皆さん、都留市産業観光課農林振興担当及び山梨県富士・東部農務事務所の皆さんからの支援を受け、6畝のたんぼで3時間、手刈りと機械刈りを交えての作業。途中、地元小学校の3年生の児童が約70名参加をし、賑やかなひとときでした。6畝(約6アール)で400キロの収穫でした(山梨県の平均作況は、10アール当たり例年550キロ前後)。

今年の米づくりは、昨年と異なり、夏場の約2ヶ月間、学生たちが交替で朝夕の水見(水入れ)を担当した分、作物に対する愛着も深まったようです。

ところで、稲刈りを終えて間もなく、たんぼの向かいの土地(部分的に畑として利用するも大半は未耕地でした)で大型のドラッグストアの建設が始まりました。町中の農地が着々と消えていくことに、疑問を抱いた学生もいるようです。山に近い農地では鳥獣被害で耕作を続けることが徐々に困難になり、町中の田畑も商業施設に転換していく、そうした地域農業の危機的な一端を、稲の生長に関わりながら実感する半年でした。

(田中夏子〓 本学社会学科教員)

昨年度はイノシシ、本年度はサル ともや収穫できず

中屋敷フィールドの稲作

「フィールド・ミュージアム」による稲作の試みが、昨年に引き続き中屋敷フィールドで行われました。中屋敷フィールドは大学から徒歩20分ほどの距離にあります。ここでの稲作は、柄杓流川と山に挟まれた田の一部を復興しようとする試みの一つで、地主の渡辺宗男さんのご指導のもと、教員を含めて12名で取り組みました。

昨年は、収穫予定日の2日前にイノシシに食べ尽くされてしまいました。今年は、田の周囲に柵を設けるなどイノシシ対策を工夫しながら収穫の時を迎えました。10月14日、稲刈りを目の前に今年も柵を乗り越えてやってきたサルに食べ尽くされました。昨年と同様、今年も楽しみにしていた米の収穫はできませんでした。しかし人間と大型獣との貴重な「交流」の機会になりました。

これからも稲作を通して野生動物との共存のあり方を模索していこうと考えています。

以下に中屋敷フィールドで稲作を体験した学生の感想を掲載します。

(北垣憲仁〓 本学特別非常勤講師)

野生動物との貴重な交流

伊藤 希

中屋敷フィールドでは毎年稲作をしています。しかし昨年は収穫前にイノシシに食べられてしまいました。そこで今年はイノシシの柵をつくり、対策を万全にして臨みました。

夏には草取りに行きました。イネは草に負けじと育っていて、青い稲穂をつけていました。このときはまだイノシシに食べられた痕はありませんでした。秋が訪れ、収穫する時期が来ると、交替で毎日田に様子を見に行きました。ある日、見回りに行くと稲穂は跡形もなく食べられていました。田のなかに落ちていた糞などから今年はどうやら、イノシシではなくサルに食べられたようです。

結局、今年も米を収穫することはできませんでした。残ったイネは後で肥料として使うことにしました。育てた米を食べられることは残念ですが、イノシシをはじめとする大型の哺乳類との共生を考える上でここでの稲作の経験はとても大切なことだと思います。

この結果にめげず、大型の哺乳類との共生のあり方を考えながら、更に工夫を加え中屋敷フィールドでの稲作を今後も続けていきます。

(いとう のぞみ・本学社会学科2年)

自ら農体験を志す

30頁で紹介した稲作づくりの試みのほかに、大学を休学し一人で稲作に取り組んだ学生がいます。

肥沼健一さんは大学から歩いて20分ほどの場所に田を借り、田植えから収穫までを経験しました。一人で始めた稲作の試みにさまざまな人が関わり、交流の輪が拡がりまた深まっていきました。その貴重な経験を紹介します。

貴重な一年の経験

肥沼 健一

「何で畑や田んぼをやめてしまうの?」僕は都留で出会った人たちにこのような質問を何度も投げ掛けてきました。そしてその答えを聞くたびに「もったいない」と口にしてきました。ですが僕が「もったいない」と口に出るのには僕が畑や田んぼを作ったことがないから言えるのではないだろうか、何

時しかそのように思うようになったのです。僕は2006年度の大学卒業をせずに大学を休む事にしました。これまで経験したことのない野菜作りなどをしながら生活をするという目的があったからです。

お米を育てると決めた時期が遅かったため、僕には貸していただける田んぼがありませんし、稲も用意できていません。それに機械を貸していただける人がいなければ水田を作ることできません。そのため、大学の事務室でいつもお世話になっていた志村千恵子さんと志村みえ子さんに知り合いの方々に紹介していただくなど、はじめからたくさんの迷惑をかけてしまいました。お二人のおかげで田んぼも稲も機械も貸していただけることになりました。

稲を植える作業までは人の手だけではできないと事だったので、機械を動かしてもらいましたが、できるだけ自分の手で、一人でお米を育てようと思っていました。

機械や稲は志村よしおさんがお世話をしてくださいました。稲の植え方も教えてくださいました。苗の持ち方や足の動かし方、言葉では伝えきれないほどの情報を体で教えてくれます。農業には世代から世代へと受け継がれていく伝統芸能に似た美しさがあるように僕には見えませんでした。

田んぼの世話を2ヶ月半ほどすると稲に変化が現れてきました。稲に穂がつき始めたのです。これは嬉しかった出来事の一つです。田植えの時期が遅かったこと、また育てる過程で稲が病気に罹ったこともあり、花が咲いただけでも僕には嬉しい出来事でした。

田植えから4ヶ月、稲にはしっかりと実ができました。収穫の時期です。お米の収穫は、まず稲を刈り、その稲を棒で干します。ここまでの作業が終わると少し日を置き、お米の乾燥を待ちます。

お米は精米をしてすぐに食べました。そのお米はとても美味しくて、涙が出そうになるほど嬉しくなりました。たくさん収穫できたのでさまざまな人にお米を分けました。お米美味しかったよ、と言ってくれると幸せな気持ちになれます。

お米作りを始める前までは、お米がどのように育てられるのか、育っていくのか、育てている人はどのような気持ちでいるのかなど考えようとしませんでした。こうしてお米を育てたことで、これまで考えようとしなかった、お米を自分が口にするまでのことを考えるようになりました。

今年一年で経験してきたこと。それは自分の考える視野を広げるよい機会になったと思います。最後に、お米づくりを手伝ってくださったみなさん、どうもありがとうございました。

(こえぬま けんいち・本学社会学科学生)



収穫後の田をながめる肥沼健一さん

私が都留文科大学フィールド・ミュージアムを知ったのは、弊社80周年記念事業で開催した「富士急行電車まつり」がきっかけです。その事業の準備として弊社の歴史を振り返る写真を収集していたときに、私の職場の傍らにあったのが、都留文科大学の博物館学で編集された冊子『富士急行線の記憶』でした。私事ですが、昨年4月にこの沿線へ居を移した自分にとっては歴史を知る上で貴重な情報でした。そのときに私から、博物館学担当でありフィールド・ミュージアムの担当でもある北垣憲仁先生へ声をかけさせていただき、以来いろいろとお付き合いさせていただいております。

初めて都留文科大学を訪問したときに、開業当時の写真を含め多くの歴史を伝える写真を見せてもらいましたが、私がもう一つ興味を惹いたのは、学生の作成した富士急行線各駅の歴史を一枚の展示パネルに表したものでした。都留文科大学駅の待合室に展示されていたものが私にとって非常に印象的だったので、写真に加えその展示パネルを提供して頂き、弊社のイベント「富士急行電車まつり」で公開をしました。おかげで、来場された多くのお客さまに大変好評で、担当した弊社社員にも質問が飛び交い、地元新聞にも写真入りで取り上げられました。また、写真をスライドショーとして残したので、弊社内でも大変好評でありました。そしてきたのだから、これを活かして今後何かすることが出来ないだろうか、というような声が挙がりました。

富士急沿線をフィールド・ミュージアムとする

奥田 壮一

私どもの富士急行線は、皆様ご存じの通りJRとの接続駅である大月と河口湖を結び、平日には都留文科大学へ通学する学生を始め通勤のお客さま、さらに週末や行楽シーズンには多くの観光目的のお客さまに利用して頂いています。つまり生活路線と観光路線という二面性を持っており、富士急行線は、「富士山や富士五湖への観光」というイメージが強いですが、鉄道事業は沿線地域に密着した取り組みを続けて行かなくては今後の環境下においては大変厳しいものがあります。弊社としても、多くのお客さまに満足して頂けるよう沿線地域の魅力を発信し、また企画を試みてきておりますが、さらなる沿線価値の向上と魅力再発見を目標に取り組んでいくとしております。

このような経緯より、弊社内での魅力発掘に新しい目を取り入れることや沿線地域の方々と繋がりをもっと強いにすること、新たな形で都留文科大学との関わりを持ちお互いによりよい関係を築いていくことを考えております。

今後、都留文科大学フィールド・ミュージアムで蓄積されてきた沿線の豊富な自然知識と弊社職員の知識とを集約し、富士急行線沿線へ足を運びたくなるような沿線の魅力を発信していきたいと思っております。さらに将来的には、地域の活性化を目的として名物、名産などの発掘や開発などを行っていく、などの夢を思い描いております。そのためにもこのたびの出会いの小さな芽を絶やさず育てていきたいと思っております。

(おくだ 壮いち・富士急行株式会社交通事業部)

展示風景



「富士急行電車まつり」の会場となった



市内在住の奥隆行氏は、失われつつある都留市の貴重な写真を蒐集・複写されてきました。それを北垣憲仁氏（本学特別非常勤講師）が年月をかけてデジタル化の作業をすすめました。このことにより、奥氏が大切にされてきた文化的遺産を保管し、有益に活用する条件が整ってきました。そのコレクションは今後、「この『通信』でも紹介していきますが、今回は奥氏に思いを綴っていただきました。

昭和41年に父奥源録が自ら創設した郡内唯一の硬式野球チーム「桂倶楽部」の創立50周年を機に『都留野球史回顧録』なる小冊子を刊行しました。これに其の当時関係された方々の手記を載せ、また当時の写真を加えるならば立派な都留野球史ができると思ひ編集したのが、同名の『都留野球史回顧録』です。

しかしながら、昭和24年の谷村町大火で類焼し、父が写した野球関係の写真も一枚も手元に残りませんでした。当時、カメラがまだ一般に普及していませんでしたので、野球関係の写真もすべて父が撮ったもので全部家にあり、子どもの頃から見慣れた写真ばかりで全部頭のなかにありましたので、父の友人、野球関係者の先輩の所を回り、複写、蒐集にあたりました。カメラの方は門前の小僧で中学時代から使っている方を知っていましたが、複写の方は初めての経験で、今のデジタルカメラと違い自ら絞りと露出を決め、ピンとを合わせ写さなければならず天候にも左右され夜間の撮影は出来ず、また接

「奥隆行写真コレクション」の整備がすすむ

奥 隆行

写レンズの購入もままならず接写リングを使用するなど、素人には容易な業ではありませんでした。時には数冊の借用したアルバムを抱え、弟が勤務するフジテレビに通い弟に手伝ってもらったこともありました。

知人、先輩の所でアルバムを拝見すると、なかに古い昔の都留の姿を伝える貴重な写真があることに気づきました。そしてまたそのような写真は意外に疎略に扱われているように感ぜられましたので、そのような写真もまた複写するように心がけました。

『野球史』出版後も細々ながら倦まずに集めた写真がいつの間にか4000枚を越える枚数になりました。

その間、市民に還元すべく昭和60年発行したのが、写真集『思い出のアルバム都留』ですが、歳をとるとともに今後はいかに散逸を防ぎ後世に伝えるべきかが一番頭を悩ましてきました。幸い都留文科大学の北垣憲仁先生の知遇を得、先生の手によりパソコンに入力、デジタル化することにより悩みは解消されました。

すでに4000余枚の入力も終わり、DVD化も目下進行中です。完成後は都留文科大フールド・ミュージアムに寄贈し、保管、管理にあたっていただく心算です。

心よく写真を見せてくださった方々、3年の永きにわたってパソコンへの入力、デジタル化にご協力を頂いた北垣先生に改めてお礼申し上げます。

（おく たかゆき・都留市在住、郷土史研究会）

『都留野球史回顧録』（1979 都留野球史回顧録編集委員会）

奥隆之氏



地域に開かれた学会の大会

日本児童文学学会の大会が都留文科大学を会場に開催される

国語の授業を問い直す

梶原 宣仁

2006年11月11日(土)～12日(日)、「児童文学と教育、ジェンダー」をテーマとする日本児童文学学会第45回研究大会を都留文科大学で開催しました。この大会の参加者は例年100名ほどですが、今回は2日間で140名を越えました。これは、本学が公立かつ地域密着型の大学だという特色を活かし、学生と都留市民は参加費無料として、参加を促したことにあります。全国の研究者と学生、市民が集い、華やかで有意義だった大会の雰囲気を感じてお伝えするために、多くの参加者のうち、お二人からお寄せいただきました。

(藤本 恵・本学初等教育学科教員)



国語では、教室で一緒に文学作品を読む。このことは、一人で読書すること何がちがうのだろうか。そんなことを考えていた私が、日本児童文学学会のラウンドテーブルに参加した。

その中で、須貝千里先生は二つの文学作品を提示され、「教科書から文学は激減して、教えやすい文学のようなものが増えている。文学が商品として消費されている」という話をされた。また、鶴田清司先生は50年間も教科書教材として収録されている『「こんぎつね」を取り上げ「国民的教材となったのは、作品に内在する価値があるのではないか」という話をされた。

二人の話を聞いてこれまでの授業が、教師の教科書どおりの解釈の押しつけになっていかなかったらどうかという疑問を持った。文学作品を読むことは、子どもが自分の読みが深まったという実感が持てることや読みを交流する中でドキドキして、ワクワクと心動かされる体験をすることではないだろうか。これまで授業がどうであったのかと、教師として考えさせられる機会であった。

(かじわらのぶひと・苗吹市立八代小学校)

研究を深化させる

「プロセス」に触れて

大町 幸奈

運営手伝いとして参加し、学会を支える土台の存在を認識する機会を持たせて頂いた。研究発表においては、研究の交流によって新たな思想が創造されていく現場の緊張感ある空気に触れることができた。それぞれの研究を相対化し、刺激しあうダイナミックな研究活動の中で、私もまた多くを発見した。

講演会では、フェミニズムの考え方が受け入れられやすいよう、講演内容を慎重に選択している講演者・小谷真理先生の姿が印象的だった。「痛い」部分をくすぐられて、聞き手が壁を築くよりも先に、その壁の不確かさを暴き、聞き手の思想の枠を揺さぶる。先生の講演は、共有であれ反発であれ、話し手と聞き手の両者が、共に研究の快楽を味わう空間を創造することの魅力を教えてくださいました。

研究者が研究を相対化し深化させていく姿は、どんな形であれ、学生に刺激をもたらしてくれるだろう。今後、様々な地域で多様なテーマを掲げた学会が開催されることを心待ちにしている。

(おおまち ゆきな・本学初等教育学科4年)

2006年12月23日

第11回 市民第九演奏会が開かれる

天野 行

感動！市民第九を歌い終えて

12年前、市の方より「来年完成する文化ホールで市民による第九演奏会を企画している。都留市には文大のオーケストラがあるのでぜひ協力してほしい」というお話を頂きました。日頃、市民との交流が少ない学生にとって素晴らしいお話と思い、学生と話し合い、お受けする事となりました。11回の数を重ね、この公演はその触れ合いの場としてとても良い機会になっていると感じています。昨年、本番の日の楽屋で合唱団の方と学生が仲良く話をしていて姿を見かけました。私にはとても温かく、そして微笑ましく写ったと同時に、少しずつ学生が市民の中に溶け込んでいくのを感じた瞬間でもありました。私は、この第九公演がきっかけとなり、更にいろいろな場面で学生と市民の交流が盛んになっていくことを願いつつ、これからも「第九」を振り続けて行くことと思っています。

(吉田 悟・指揮者、神奈川フィルハーモニー管弦楽団)



響け都留の「第九」

澤田 洋一

合唱をやった人なら第九を歌って見たいと望んでいると思います。しかしこの都留市で…?とても第九の演奏会なんて考えても無理なことでした。でも平成8年に近郊で希に見る「うぐいすホール」が落成し都留市合唱連盟を中心に都留文科大学合唱団と近郊県内外の合唱愛好家が集い落成記念に歌ったのです。そこには、吉田悟先生御指導の都留文科大学管弦楽団があつたからです。

第九を歌いたい合唱愛好家にとつてもこんな幸せなことは有りません。そこから市民と都留文科大学の合唱団と管弦楽団の絆が生まれたのです。

今年、あれから11回です。それも毎年続いている、いや続くことでしょう。これはまさしく、文化都市、都留市の市民と都留文科大学の皆さんとのかかわりの最大のイベントです。第九演奏会実行委員長として、この紙面を通じて皆さんに御礼申し上げます。どうかこの第九演奏会を末永く見守ってください。

(さわだ よういち・平成18年 第11回市民第九演奏会実行委員長)

平成18年12月23日午後2時45分、私たち市民第九合唱団員は、都の杜「うぐいすホール」に入場し、ステージ後方に着席しました。

やがてオーケストラの演奏が始まります。第一楽章の静と動の対比、第二楽章の激しいリズムによる激情、一転して第三楽章の限りなく穏やかな音の流れ、これ等三つの楽章を、都留文科大学管弦楽団の見事な演奏によりじっくり聴くことが出来ました。そして、市民第九はこのオーケストラによって支えられていることを実感しました。

第四楽章は、いよいよ合唱団の出番ですいくつかの山となるようなパートを歌い、最後に「歡喜よ、神々の火花」(フロイデシエーネル……)とフォルティシモで歌い切つてフィナーレとなります。この瞬間は全身がぞくぞくするほど感激し、第九を歌う醍醐味を感じられます。今年の第九は合唱団としても最高の出来だったように思いました。

市民第九も今回で11回となりましたが、その間一貫して吉田悟先生がオーケストラと合唱を指導して下さいました。その積み重ねがあつてこのように演奏が成功を収めたのだと思います。吉田先生に心より感謝申し上げます。

私たち団員も来年の第九に向けて頑張る覚悟です。

(あまの すずむ・平成18年 第11回市民第九演奏会実行副委員長、第九合唱団団長)

編集後記

○今泉吉晴氏は、「どのような仕事がからしと社会を共によくする本当の仕事かを問う必要がある」と述べています（巻頭文）。氏は、ソローの『森の生活』の思想を、自己の探究と経験に基づいて現代の主題として提示してくれていますが、氏が自ら考案した薪ストーブの活用の、その試行錯誤の過程が実におもしろいです。

○特集1は、すでに歴史をもつ都留フィールド・ミュージアムの運動をさらに広く深くしていくために、自分たちの実践を振り返るという趣旨をもちます。その実践はいずれも個性的ですが、その叙述からは多くの人の関心や喜びを引き起こしつつ人をつないでいく可能性・方法が読み取れます。

○特集2は、地域交流の真の基礎は地域社会にあるという考えから編集してみました。都留市には、歴史的にも今日も、ゆたかな文化が息づいています。都留市立図書館についてですが、以前は大学に図書が少なく学生たちがお世話になってきたのですが、その前史に位置づく「床屋文庫」のことなどは、日本の図書館史に記されるべきものでしょう。ぜひ熟読ください。

○この間、地域交流の実践が新たな展開をみせています。地域の社会教育機関（博物館・公民館）の事例（16～17頁）もそうですが、池田和秀氏との出会い（18～19頁）、ハッカライネン氏の来学（21頁）、富士急行電車まつりのこと（32頁）など、ご注目ください。

○本年度の市民公開講座は、英文学科の先生方に講師をお願いしました（27頁）。コーディネートして下さった依藤道夫教授は、この3月で定年退職されます。地域交流研究センターの運営委員を担っていただくなど、地域センターの活動を丁寧に支えて下さいました。また、この通信の紙面を楽しい絵で飾ってくれた成瀬洋平氏が、この3月に本学大学院を修了されます。

○地域交流研究センターは、市民と大学との共有の場であろうとしています。その活動は、社会の公共的な機関である大学を、市民とともにつくっていくという意味をもっています。事実、地域交流研究センターの実践や思想・文化が、大学改革に着想を与えてもいるわけです。都留文科大学は、教員・職員・学生たちの努力、および市民の理解と支援とによって発展してきているのです。ところで新聞で報じられましたように、市当局は、都留文科大学の「独立行政法人」化を図っています。しかし市議会における市長の答弁書を見ても、そこには都留文科大学が実に健全に経営されていることが述べられており、公平に見て、法人化を急ぐ理由は見出し得ません。市長は「アジャイル（俊敏）」ということばを使っていますが、これは実質において民意・民主主義をないがしろにする以上の意味をもち得ません。衆知というものを軽視することなく、市民に判断材料を提供し説明すべきでしょう。大学の制度の根本的な改変を行おうとするのなら、地域の大学のさらなる発展についての理念を語り、適正な時間をかけ、市民とともに公正に論議をふかめていくだけの勇気をもつべきでしょう。

○次号は、第三回地域交流フォーラム「地域にとって大学とは何か」（2007年3月17日）を特集する予定です。

（編集長・畑潤）



絵・成瀬洋平（本学比較文化学科大学院2年）

地域交流センター通信 第11号：2007年3月23日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当（今泉吉晴・田中孝彦・森博俊・畑潤・田中夏子・西本勝美・粕谷貴史・北垣憲仁）

（C）発行：都留文科大学地域交流研究センター

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel.0554-43-4341（代）

統括編集者：北垣憲仁